

平成十七年七月十日
発行 回帰洞
鹿嶋市宮中一―五―二三

「ガマン教育」一歩前へ！

おもちゃ屋の前で三、四歳ぐらいの男の子の足がピタッと止まる。母親は知らずに二軒先ぐらゐまで歩いて振り返り、どうしたのという表情をする。男の子は指を延ばして店先をさし、欲しいおもちゃがあるという意志表示をする。母親は静かに首を横に振る。

「だめよ、早くおいで」の無言の表現だ。

「いやだ、いやだ、これ買って！」と男の子は強く足踏みする。

「……」母親は黙って見ている。よくみかけた光景である。

私は十歳から十五歳ぐらゐまでの間、この光景をなん度も見た。なぜなら、おもちゃ屋が自分の家より四軒先にあつたからである。昭和のはじめ頃、今から六十年ばかり昔の母親は決して子どものそばへは戻ってはこなかった。子どもはさまざまにしまいには泣き出す子、地面にあおむけになつて足をバタバタさせる子や、しゃがんだまま動こうともしない子、それでも母親は動かなかった。表通りの真昼、大勢の通行人のいる

中で、母親は顔を赤らめながらも妥協はしなかった。

しばらくして子どもの方が折れて、しぶしぶ母親の側へ行くと、母親はきまつて子どもの頭をなでて耳元に囁いたものだ。なんといったか。それを知る由もないけれど、いま想像できることは、

「こんど、おまつりに来たとき買おうね」というような言葉であろうか。子どもは、

「うん」と納得して母親の手につながら、おもちゃ屋を後にした。

母親は子どもにガマンを教えたのであり、子どもはなんでも思い通りにはならないことを体験した。

昭和二十年代までの母親はどの子も育てる上で、例外なくガマンすることを教えてきた。ガマンができない子は生きてゆけないことを身をもつて体験してきているし、学校でもガマンを教えてきた。

ところがこの六十年のあいだに、母親も父親もガマンを教えられなくなつていた。そして学校でもガマンを正面から教えることができなくなつた。それどころか、先生が生徒を叱れなくなつていった。叱つた先生は父母からつるし上げられ、監督官庁等は叱つた先生を悪者にした。

いくら情熱があつて子どもの教育に献身しても、父兄も、教育委員会も理解してくれなければ、学校内での立場も危くなるため、先生は当りさわりのない、熱のない教育しかできなくなつていった。

さらに最近では、運動会から競走が姿を消しはじめていくという。一〇〇メートル、五〇メートル競争などで、一等、二等、三等を決めるのは差別をつけることになるから廃止するのだと。冗談ではない。人にはそれぞれ向きがあつて、勉強が良くできる子や、勉強はそれほどではないが体育には強いという子も多い。もし、運動会で一等をとるのが差別なら、試験やテストで百点をとるのも差別にしないとおかしくはないだろうか。

人間は、とくに子どもは万全ではない。幼児期は父と母が躰として素直な子どもに育て、保育園や幼稚園等に通う年頃は社会性を身につけ、小学校以上では年齢に応じて学力や判断力を養うことになる。

世の多くの家庭では、このように務めて子どもを成長を見守り、人としての責任を果すのである。

私は刑務所や少年院に所属して、受刑者や少年たちの立直りのために面接をしたり講話をする教師の仕事をはじめて二十二年になる。

現在通っている少年院の十六歳から二十歳ぐらゐまでの少年たちは、社会にいたとき、生れてからこのかたガマンをしたことのない少年たちであつたのだろう。

少年院に入つてまずしなければならぬのがガマンである。とまどいもあればためらいもある。しかし院内での生活は遅れてはならない行動の連続であつて無我夢中でついでゆくのがやつとであろう。

「ホッ」と気がついた頃はガマンが身についていて、いつの間にか皆と一緒に行動している自分を見ることとなる。

このガマンできる自分を自覚できるようになつたとき、少年たちは更生への道を歩みはじめる。

法務教官は、この少年ひとりひとりの生活と変化を注意深く見守り指導していく。二十四時間密着した骨の折れる生活を、教師は頭の下がる思いで見ているが、もしこの少年たちの両親や家族が、あるいは学校の教師が、早目にガマンがこの世の中を生きていく上で大切なことだと教えていたら、この少年たちにも違つた人生があつたのではないかと思

う。

おそまきながら、世の中の人びとにお願いしたい。子どもたちのために「ガマン教育」を一步前へ進めていただきたい。それが子どもをフリーターやニートにならざるをえない自信のない若者にしない第一歩でもあると信じるからである。

幼児期に母親が「ガマンしようよね」と頭をなでてくれた記憶が、将来どのように役立つかはわからないが、私は戦争のさなかのガマンとその後、このガマンの経験が私の東京時代を支えてくれたと思っている。

ちなみに、ガマンは漢字では我慢と書き、自慢の意味とする（仏教用語）が、こらえ忍ぶことのできる自分という意味に用いられて、辛抱すること、第一義として用いられている。

ガマンができる自分をひそかに自慢してもいいと思う。

ガマンできる人間は容易にはキレない。犯罪に走る人びとの大半がキレやすいということからもそれはあきらかなのである。（矢）



「死にたい、死にたい、死にたい、死にたい。誰か一緒に死んでくれる人いませんか。睡眠薬を飲み、練炭火鉢のガスで苦しませて死ねます。ただ、一人では死ぬのも淋しいのです。三、四人で賑やかに死にましよう——」

インターネットの自殺のページをひらくとあらわれる自殺へのいざない。そしていとも簡単に死んでいく若者、また分別あるべき四、五十歳台の人々。

あなた方は、人間のなんであるか知らずに死んでいく。しかも見ず知らずの人間が、ただ死にたいの願ひから集まって死ぬ。死にたい人間にも理由はあろうし、口実もあろう。仕事のゆきづまり、ゲームにのめり込んでの借金、失恋、みじめな自分に愛想がつき果てての死への願望。教えあげればキリがないであろう。

に希望者自に
一死と生に

それらが自分自身の意気地なさから発しているのを考えたことがあるか。自分が生命を受継いだ人間であることを考えたことがあるのか。

人はひとりでは生まれない。父と母から生命を受継いで生れたのである。父と母もまた、父と母からそれぞれ生命を受継いでこの世に生まれてきている。だから一人の人間には

父母が二人いて、祖父母は四人いることになる。また曾祖父母が八人いたことも理解できるに違いない。

こうして祖先を遡っていくと、五十代では二千二百三十一兆七千九百九十八億一千七百六十八万五千二百四十八人というぼう大な人数になる。例を天皇家にみれば第七十五代崇徳天皇が五十代前の祖であるから、時代は平安時代である。多少の誤差はあっても千年も昔へ遡れば一人の人間の祖数はこのような数となる。

このうち、たった一人でも子孫を残すのにためらいやあやまちがあれば、現在の自分は存在しないということをおぼえれば間違いない。

生命を受継ぐということは、このようなことであり、一人の人間の背後には無数の祖先が無言の後押しをしているのである。とくに、三代前曾祖父の八人の祖霊、四人の祖父のいづれかの祖霊が守護霊として見守っている。この祖霊は意識することによって力を発揮するのであり、祖先をまつるのはこの祖霊の力をいただく意味からも大切なことといえよう。

また、あなた方は自分の身体を考えてみたことがあるか。

人間の身体には無限の宇宙があるといつて大きな間違いはない。なぜなら二足足らずの人間の身体には、

天文学的數字が並んでいるからだ。ひとりの人間は六〇兆個もの細胞から成立する。血管の長さは約一〇万km地球二廻り半という信じ難い長さであり、脳は一四〇億個の神経細胞で組織され、肝臓もまた二五〇〇億個の細胞の集まりである。

高等動物の代表が人間であることは間違いないが、決定的な欠陥が人間にはある。それはなにか、いうまでもなく他の動植物は子孫のために必死で生きている。本能といえどもそれまでだが弱い動物ほど必死になっているのはいうまでもない。

ただ、人間だけがいま未来を見ない。つまり人間という宇宙は心を失ったままである。

そのような人間喪失に対して藤沢周平はその著作『三屋清左衛門残日録』の中でいわけしめる。

「衰えて死がおとずれるそのときは、おのれをそれまで生かしめたすべてのものに感謝をささげて生を終わればよい。しかしいよいよ死ぬるときまでは、人間はあたえられた命をいとおしみ、力を尽して生き抜かねばならぬ」

けだし名言といえよう。

人生相談お受けします

TEL 〇二九九・八二・二〇九三